

寄

稿

戦争について思うこと

ささき薬局 佐々木 健一

平成 28 年 4 月 30 日、大崎市民会館で「安保法制廃止を求める大崎大集会」が開かれた。私は友人からの誘いがあり、出席した。集会は 1,100 人の参加者があり、慶應義塾大学名誉教授（憲法学）で弁護士小林節氏の講演「政治の暴走を止めるために」があった。氏は昨年 6 月の衆議院憲法審査会において、安保法案は違憲であると発言した人である。

この集会は、「政治の暴走を監視して、戦争を防止する」ことを目指すものであった。要は戦争を放棄して、永遠に他国を侵略しないという趣旨である。

会場で話を聞きながら、子供の頃、戦争中に体験したことを思い出していた。

私が生まれた昭和 10 年には、日本はすでに支那（中国）と交戦状態に入っており、昭和 16 年 12 月 8 日には日本は真珠湾を攻撃し、大東亜戦争が始まった。昭和 16 年は「皇紀二千六百一年」であり、この年に小学校は国民学校に名称が変わった。

戦争が始まり、私は昭和 17 年 4 月東小野田国民学校に入学した。昭和 17 年、18 年、19 年と経過するうちに、各家庭からは若者が次々と出征して行った。だんだんと食料不足が深刻な状況になって来た。2 年生の時には、学校の昼食時に弁当検査があり、質素な内容にするように指導された。

やがて B29 による空爆が始まり、東京方面からは、国民学校の児童が親元を離れ、鳴子温泉などに移住する（学童疎開）こともみられた。また、親戚を頼って家族ごと移住する人達も増えてきた。

私は、将来、海軍に入って国を護るつもり

であった。「若桜」という海軍の啓蒙雑誌を読んでいた。

私の父（健治）は、小野田の池田医院の薬局に勤務し、池田伊兵衛先生の御薫陶を受け、薬種商の資格を取得した。昭和 8 年小野田の現在の地に「佐々木薬店」を開業した。

その父が昭和 19 年 4 月（国民学校 3 年の時）に、赤紙召集を受け仙台の陸軍第二師団に入隊した。32 歳であった。間もなく朝鮮に行き、さらに支那へ向かったことが、父からの葉書で分かった。2 度受信したが、やがて音信不通となった。父は名誉の戦死で、もう居ないものと思った。

昭和 19 年ごろには、戦局不利の状況であった。国民学校の校庭では、割烹着姿の母親達が集まり、在郷軍人（平時は生業につき、必要に応じて召集される元軍人）から竹槍の訓練を受けていた。母（やすの）の話では、訓練はアメリカ軍が本土に攻めて来た時に、奥座敷に誘い込んで竹槍で攻撃するのだ、と教えられたという。

空襲に対する警戒警報の発令がだんだんと増えて来て、その都度、防空壕に入り、警報の解除を待った。情報源はラジオである。

国民学校には、仙台の陸軍予備士官学校が疎開して来た。教官は民家に分宿し、生徒は学校に泊まった。私の家にも陸軍少尉の教官が泊まっていた。生徒達は、校庭のあちこちに自分一人が入る分の蛤壺を掘り始めた。敵襲に備えるというものだが、何とも心もとないと子供心にも思っていた。

父が出征した後、私の家は母と弟（恭）（佑）2 人、叔母（佐藤（旧姓小野）みつ子）、それに自分と 5 人暮らしであった。

食料事情は、量的にも質的にも次第に悪化して行き、糲（かて）めしは日常的なものとなった。じゃがいも糲は 暖かい時には良いが、冷めたものはとても美味しいとは言い難かった。

店には、商品が次第に少なくなっていた。薬は軍需用が優先ということで、店に新しく入って来ることは無くなってきた。終戦時には売れる商品が全く無くなっていった。

戦時中に流行った標語・歌詞などで思い出すものは次のようである。

「欲しがりません。勝つまでは」、「ぜいたくは敵だ」、「パーマネントは止めましょう」、「月月火水木金金」、「撃ちてし止まむ」、「八紘一宇」、「鬼畜米英」、「一億総特攻」、「一億総玉砕」、「東洋平和のためならば、何で生命が惜しかろう」、「いざ来い ニミッツ、マッカーサー、出てくりゃ地獄へ逆落とし」。

昭和 20 年 8 月 15 日、国民学校 4 年生であった私は、暑い日差しの中、校庭に並び天皇陛下の玉音放送を聞いていた。話の内容は雑音があって聞きとりにくかった。しかし、前に向き合っていて並んでいた先生達の中には、涙を流しておられる方もおり、戦争に負けたということは理解できた。

終戦から間もなく、朝鮮人による暴動があり、近所の商店は全部閉めてしまうことがあった。この騒ぎは間もなく収まった。

昭和 21 年 5 月になって、突然、父が帰って来た。長い間死んでいるものと思っていた

父を見た時、大変に嬉しかったし、父との間に眼に見えぬ力が働いているように感じたことを覚えている。

後日、聞いた話では、父は今の北朝鮮から南支の桂林の近くまで進軍したということだった。戦いが不利となってからは、昼は山中に身を潜め、夜になって行軍するパターンだった。

父は衛生兵であり、前線で戦闘に参加することはなく、後陣にあって、傷病兵の手当などの業務についていた。食料は戦争中も戦後もずっと不足しており、体の痩せはひどく、腹部を前から押すと背骨に触れることがあったという。

終戦となり、満州、シベリア方面での兵士は、寒冷下の強制労働で苦勞し、犠牲者が多数出たといわれる。

支那では、武装解除後に蒋介石軍の支配下に入った。（戦時中、日本は支那と交戦していると理解されていたが、実際は、日本軍、蒋介石軍、毛沢東軍の三つ巴の戦いであった。）「強制労働などは全く無く、無事に日本に帰してくれた。蒋介石は偉い」と父は言っていた。

その後、世の中の経済状況が国復したこともあり、生活は少しずつ余裕が生じてきた。

さて、私の体験した戦時中の事柄を一部紹介したが、あんな想いはもう懲り懲りである。子供たちには、平和な日本、美しい郷土が永遠に続くように願っている。

（一部、地名などは当時のものを使っています。）



END